

Naoki Kashio and Carl Becker eds.
Spirituality as a Way: The Wisdom of Japan

京都大学学術出版会 二〇二一年刊
xi + 二一九頁 四五〇〇円 + 税

葛西賢太

樫尾直樹、カール・ベッカー両氏の編集になる、「日本的なスピリチュアリティ」の探究をテーマにした英文著作が刊行された。邦訳すれば『道としてのスピリチュアリティ——日本の智慧』といったタイトルになるだろうか。医学、看護学、生命倫理、公共政策、教育学、哲学、心理学などさまざまな分野の研究者が参加する、樫尾氏主催の「霊性研究フォーラム」での十年超の議論がもたれているようだ。本山一博、村上和雄のふたりの章は、研究論文の枠に収まらない「エッセイ」として、真に竹の図柄を配したレイアウトになっている。
多様なアプローチを配した英文の著作であるので、まずは目次を英文で示す。ついで、各章の内容について私なりに要約し、最後に本書に触発された問いを付け加えたい。

目次

Introduction: Issues in Contemporary Spirituality Studies
Naoki Kashio and Carl Becker

Part 1: Spirituality in Grief Care

1. Spirituality Healing the Grief of Disaster Victims:
Lessons from Support After the Great East Japan
Earthquake
Noriko Setou
2. How Japanese Spirituality Addresses Grief
Carl Becker

(658) 86

Part 2: Spirituality in Spiritual Care

3. Japanese Cancer Survivors and Spirituality:
Meaning in Work as Response to a Spiritual Need
Naomi Hirota
4. The Modes of Spiritual Care
Takaaki David Ito
5. The Way of Japanese Spirituality:
From the Viewpoint of Zen Philosophy
Yoshiharu Nakagawa
6. A General Theory of Japanese Meditation
Naoki Kashio

Essay 1. Meditation Experience, Consciousness and

Language: To Study the Invisible World
Kazuhito Motoyama

Part 4: Worldview in Global Context 7. Spirituality: A Question to Japanese Society Yoshihiro Hayashi

8. Reincarnation Revisited: An Inquiry into
Three Types of Reincarnation
Fumito Takekura

9. Trends in Modern Spiritual Culture:
Eckhart Tolle and the Neo-Advaita Movement
Masayuki Ito
- Essay 2. The World of Something Great in
the Eyes of a Life Scientist Kazuo Murakami

本書の内容から

冒頭では編者が、本書の意図について説明する。日本語の「道」にみるような求道の要素に着目する。キリスト教が一つの推進力となってきた近代文明に対抗する動きとして「スピリチュアルだけと宗教的ではない (spiritual but not religious: SBNR)」と自らを位置づける人びとが現れた。欧米におけるスピリチュアリティは、キリスト教への対抗を反映して、個人主義的で心理学的要素を含み、教会制度の枠にとられないよう説く。いっぽう、日本的なスピリチュアリティは、実践重視、「気」や「呼吸」などの身体エネルギー操作を実践、万物を相互依存・相関するものとみなし、聖俗を分けず、日常生活との接続を重視する、といった特徴を持つものと考えられる。以上のように編者は俯瞰する。

第一章では瀬藤乃理子が、東日本大震災の災害心理支援に携わった経験から、日本的なスピリチュアリティについても言及する。津波の犠牲者の多くが行方不明のままできちんとした弔いがないという「あいまいな喪失」(ポリーリン・ボス)を抱えて、生き残った被災者に、原状復帰ではなくても回復が可能になるか。個人主義的な文化に生きてきた人と異なり、悲し

みを表現せずに耐える日本(東北)文化にあわせた心理支援が必要だ。瀬藤はさらに「現地の(心理)支援者のための支援も手がけた経験から、民俗的信仰や儀礼祭祀が、人生に意味を与え苦しみをやわらげると指摘する。

第二章ではカール・ベッカーが、死者・他界との関わりを説明するために医学的説明と宗教的説明とをしばしば重ね合わせるように引き合いに出す、日本的な語り方を指摘する。仏壇や年忌法要などの「継続する絆」(デニス・クラス)を活用しての死者の弔いは、重要な他者を喪失した悲しみが心身に悪影響を及ぼすのを抑える、というように。また、日本的な死者の霊魂と生者との接点を四点示す。霊魂目撃譚、臨死体験、お迎え、そして日々の仏壇での読経や食物奉獻、といった実践である。ベッカーは国内外の先行研究やデータを詳細に示している。訳語も直訳ではない工夫された表現が当てられている。たとえば、「東日本大震災」を直訳せず the triple earthquake (三重型 tsunami-meltdown disaster of March 2011) としていることは、この震災の経験がなんであつたかを即時に理解できるようにし、経験を普遍的なものとする工夫と思われた(日本での定訳は the Great East Japan Earthquake)。

廣田奈穂美による第三章は、がんサバイバーが働き続けるまいに直面する不安や懸念についての、十六名への聞き取りに基づく。村田久行によるスピリチュアルペインの理解、半生の時間を失い、周囲との関係を失い、自律を失う、の三点に着目して実存的打撃を評価し手当てしようとする方法論を踏まえている。現在、がんは日本人のふたりにひとりがかかるといわれる

が、罹患した人の三割は働き盛りで、うち三割が「同僚に迷惑をかけたくないから」仕事を辞めるといふ。儒教的な価値観を共有する日本人にとって、働くことは自己の存在意義に関わる求道的実践でもあり、他者や仕事とのつながりを保つことがきわめて重要なはずである。がん治療を受けて寛解し職務復帰した後には、がんサバイバーはどのような「スピリチュアリティ」に関わる体験をするのか、探究する意義は大きい。

第四章は、スピリチュアルケアという傾聴的関わりのある方について伊藤高章が論じる。二〇一四年にブチャレスキ他が示したスピリチュアリティの国際的に評価される定義が、個人主義を前提としながら個と個をつなぐ関係性を核にしていることを確認する。三人称的な研究者―実践者モデルに基づく診断的で一方向の関係（村田久行の理論が一例）、専門職モデルや特定の宗教観を押しつけることなく患者等の世界に共感的に深く入っていく二人称的な探究（臨床宗教師など、ブチャレスキの定義に近い）、一貫性を持った個人（individual）などはなく分人（dividual）としての自己内の矛盾や多様性や内なる他者どうしの対話を捉えようとする一人称的な関わり（ブチャレスキの定義に問題提起）、自己主張する言葉をもたなかった病む人・弱者の言葉を（無視や手懐けや排除でなく）掲げ・聴く「ゼロ人称」の四つを柔軟に用いながら、権威や専門性を患者に押しつけない関わりを探究する。

中川吉晴による第五章は、鈴木大拙の「日本的靈性」や井筒俊彦の著作に導かれて、日本の禪が理想とするあり方―徹底的な自己省察と、その結果としての自己無化（空）、自然や他

者との一体化や「あるがまま」の承認―をみようとする。理想とされる「非二元論」的な境地は、説明されてすぐ理解されるものではなく、参禅の実践や日々の奉職（浅原才一）のさきに「空」の境地の獲得があり、この境地から見ると、部分にとらわれずに全体があるがまに見る姿勢（沢庵宗彭）が、茶道や華道、水墨画のような対象と一体化する芸道実践へとつながっているとする。

櫻尾直樹による第六章は、日本の瞑想の一般理論提示の試み。近代の日本は東西のさまざまな哲学的実践が出会う場であるという井筒俊彦の言葉を引きながら、これまでの瞑想研究は意識を捉えがちであったとみて、身体や、気・呼吸などのエネルギーに注目して瞑想を考える意義を指摘する。瞑想実践を含む宗教の「神学」「教育学」に引きずられぬよう、櫻尾は、その瞑想の身体実践はどこに位置づけられるかを吟味する。事前準備と位置づけうるリラクゼーションから身体の管理がはじまり、多様な方法で精神を穏やかに落ち着かせ（mind simplification）、イメージを活発に働かせ（image activation）、エネルギーをいきいきと動かし行き渡らせる（energy activation）という構造が多くの瞑想に共通している。身体、意識、エネルギーの三者に注目すると、多くの瞑想が九段階の過程を通ることをとらえることができる。日本の禪が芸術や武道などと分かちがたく結びつく（meditation complex）ように、「日常実践」と直結するあり方も含めて瞑想を捉える必要を説く。この「日常実践」が指すものについては、評者の私見を後述したい。

本山一博の「エッセイ」は、瞑想を実践し指導する宗教者として、しかし、「教育学」「神学」をこえて実践と体験に焦点を当て、また自身の瞑想指導上の工夫も引き合いに出しながら、なにが起きているのかをとらえようとするもので、瞑想を扱う他の章（中川、櫻尾、伊藤雅之）と好対応である。個人としては靈魂が実在するという立場に立つようだが、靈魂の形而上学を説くのではなく、それを「エーテル」などを介して「科学的に証明」しようとするのではなく、瞑想者の経験から知りうる意識、精神、身体のある方として語ろうとする。瞑想はしばしば自己や世界の「観察」として語られるが、その観察する主体はなんだろうか、瞑想を語るさまざまなテキストで観察する主体はどう論じられているだろうか、一貫して本山は問う。彼は自己を、意識、精神、身体を三層で捉え、また瞑想を知ること、制御すること、受け入れられることの三つの観点から捉える。多様な対象を知り、感じる主体から観察する主体を分離させる意識の二元性を通して制御し、自己のありさまを受け入れることによって意識の浄化を図る、という実践である。形而上学を離れて多様な瞑想の実体験を言語化し、それを比較研究しようという立場から、自身が瞑想を味わい教える工夫と照らし合わせ、「ヨーガストラ」や「中論」の記述を再検討する姿勢は、新鮮。

第七章では、問いに答えるスピリチュアリティ（answer-spirituality 既存の宗教）と、問うスピリチュアリティ（question-spirituality）とに分けることを林貴啓が提案する。日本人は宗教嫌い・宗教不信に至っているいっぽうで、超常現

象への関心や生の意味の探究など、宗教的な問いは広く共有している。新聞調査や世界保健機関の健康定義、江原啓之の活動や医療分野での「スピリチュアルケア」の広がりなど、その実例を示しつつ、宗教者ではない人が実存的宗教的な課題を前にする時、それを語る語彙として、「スピリチュアリティ」という語は今後も重要であることを示す。なお、林のいう「問うスピリチュアリティ」（一五二頁）は、知り得ないことへの断定や言及を留保する態度としての「不可知論（agnosticism）」と位置づけることができる。

竹倉史人の第八章は、「輪廻転生」が国内外でどのように受け入れられているかをデータで示す興味深い一章で、同名の彼の単著の要約となっている。輪廻転生といえは東洋の宗教的信念と思われがち（オリエンタリズム）だが、実は輪廻転生の信念は世界中にあるという。欧米にもあり、その国の主流の宗教からみると異端的とされる内容を持つのでその宗教からの影響とは思われず、その詳細を詳しくみる価値がある。国際社会調査（ISSP）の宗教モジュールにも、二〇〇八年より輪廻転生を問う項目が加えられた。輪廻転生は大きく三型に分けられ、ごく自然に近くに転生することがあたりまえという文化（再生型）、前生の行為の結果として次の転生が決まるがこの輪廻から解脱することが望ましいとみる文化（カルマ型）、アラン・カルデックなどのスピリチュアリズム実践で死後生や輪廻転生を探究する文化（再―受肉型）の三つがあるが、日本は珍しいことにこの三つが揃っていて、ただし浄土教の影響が強いところでは輪廻転生そのものが否定されているという。

伊藤雅之の第九章は、現代のさまざまなスピリチュアリティ文化の一例として、新・非二元論 (Neo-Advaita) 哲学の広がり、とくに近年広い支持を得ているエックハルト・トールの思想を検討する。私たちは、感じたり考えたりする内容を、自分自身の属性と考えがちだが、トールは「思考と意識とを切り分ける」ことを提案する。これまでのスピリチュアリティ文化でみる「自己理性」の一種のようにみえるが、それらをこえた「意識」をおく点で、トールは異なっている。伊藤はトールを、長期間の修行や実践 (satsang) 継続を要しない頓悟主義 (immediatism) を主張する他の新・非二元論哲学の論者・実践者たちと比較し位置づける。また、人間をどこまでも解体分析の対象とみるリベラル・ヒューマニズムに対し、解体も分析もできない「意識」を描くトールの独自の立場を確認する。なお、このようなトールの著作は (キリスト教の枠にとらわれないう) スピリチュアルケアの実践者のなかにも広く読者がいて、私は複数の実践者からトールの著作を強く薦められたことを補記しておく。

最後の章にあたる「エッセイ二」は、遣伝子・生命の驚異からみえるスピリチュアリティをも論じていること知られ、最近没した、生命科学研究者の村上和雄によるものである。遣伝子の膨大な情報量と、無数の細胞が一つの身体として秩序だって生命を保つことに対する素朴な驚きから、誰が遣伝子を書いたかという問いに彼が至り、それを Something Great と呼んでおくことにした経緯を語る。以下、村上は、生命は自明の、科学によってすべてが明らかにされるものというよりも、生命科学

深く理解できたり多くの気づきを得られたりするものがあった。本書に触発された二つの問いをあげておきたい。一つは、本書の中で形を変えて繰り返し説かれる、回復すべきあるいは充実すべき「日常 (everyday life)」とはなにか、という問いである。もう一つは、本書に論じられた事例の中で、教師 (師) とはなにかということである。

櫻尾が瞑想複合体 (meditation complex) として、禪と、日常としての芸道・武道との接続を述べるとき (一一五―一六六頁、一二二―一二三頁)、想定される芸道・武道は、日常とはいっても高度な修練と緊張感を以って想像される特殊な世界である。瞑想の工夫として自分の身体をつねった時どのような感覚が生じるかを観察するように本山が提案するとき、提案は私たちの日常で体験できる出来事からスタートするのだが、その観察を進めていった先には「明晰な意識状態」という、日常とは異なると思われる世界が考えられている (二三八頁)。あるいは、瀬藤が被災者のところのケアを行い、同時にところのケアの担い手たちの支援を行うとき (二六一―二八頁)、被災者には穏やかな日常の回復をめざすにしても、支援者の側には櫻尾が武道・芸道に求めるような修練と、研ぎ澄まされつつも柔軟さをもそなえた緊張感も醸成されるはずだ。これら同じ「日常」という言葉で呼んでいるものの違いをすりあわせて読むことで、本書の扱う「スピリチュアリティ」概念の広さが確認されるだろう。

本書で論じられた多様な「スピリチュアリティ」は、誰かに

が進めば進むほどそのしくみに神祕を見いだす例を繰り返しながら、諸元素からなる私たちの身体はやがてその諸元素にかえり、別の生命がその諸元素を採り入れるという循環を思うと、身体は「借り物」である。アルコール依存症の病理や遣伝の特性、にもかかわらず断酒自助グループによってその病理にも効能があることを考えると、心と遣伝子はなんらかのつながりを持つていことが確認できる、などである。村上は万物に共感して祈る日本的な霊性が有意義な時代に私たちはいる、と語る。

評者の印象

本書の背景となる近年の動きとして、(あえてそう呼ぶとすれば、本書のテーマである求道的スピリチュアリティ研究の先駆者としての) 井筒俊彦の著作を再読する「井筒ルネッサンス」的な状況が改めて整えられたということがあげられるだろう。若松英輔による評伝や著作集の刊行などを通して井筒の著作にあらかじめ触れていた読者は、井筒の関心が「古くて新しい」ことを、本書から改めて味わうことができるだろう。

また同時に、本書は、近年、高等教育の場で展開を見ている国際日本学の伝統に寄与するものであろう。日本について、日本語ではなく英語などで発信し学び論じることの意義を、すでに日本語で読んでいた著者たちの論考と重なり合うものを英語で読むことによって実感することができた。また、ベッカーの章は、先にとりあげた東日本大震災を指す英訳表現以外にも、全体として訳語や説明が工夫されていて、日本人が読んでより

よって教えられるものだろうか。あるいは、日本社会を生きながら、食物が身体に同化するように、自然に消化され吸収されるものだろうか。いいかえれば、日本的なスピリチュアリティにおいて、師とは誰か、弟子とは誰か、教育訓練や修行とは何か。本山や櫻尾や中川が、あるいは伊藤雅之・伊藤高章が論じる内容の背後に、それをどのような人が、どのようにして「伝える」のか、あるいは、すでに生得しているものをなんらかの教育訓練により発揮させるのかを問いたくなる。本書で述べられるさまざまな日本のスピリチュアリティの事例において、弟子は師の完全なコピーなどではないはずで、むしろ、師の背景の特殊性を適宜捨象しつつ、弟子自身の特殊性を省察考量し、師という刺激を通じて師とは別物として生まれしていく。その弟子の中のものかを認めて修行なり伝授なり教育訓練が完了したと師は判断する、とすれば、そのなにかとは、なんだろうか。

日本的なスピリチュアリティを研究するというテーマで編まれた論集である本書を、評者はふしぎな既視感と驚きを覚えながら読んだ。かつて、公案から展開する禪の説明に困惑し、文化的背景にも言及する英文の禪の説明を通して腑に落ちた思いを味わった、その時の体験も、このような既視感と驚きに満ちていた。本書との対話の中で、日本的なスピリチュアリティを語る英語表現を味わうだけでなく、読者が自らの立ち位置を見なおすヒントを得て頂ければと思う。

宗教研究

第 95 卷 402 第 3 輯

論 文

田中 浩喜：蜜月の盲点	1
城所 喬男：「正直ノ道」	25
井口真紀子：死生の悲しみをわかちあう	49

書評と紹介

岩田 文昭：井上順孝著『グローバル化時代の宗教文化教育』	75
岩井 洋：山中弘編『現代宗教とスピリチュアル・マーケット』	80
葛西 賢太：Naoki Kashio and Carl Becker eds., <i>Spirituality as a Way</i>	86
長谷千代子：櫻井義秀編著『中国・台湾・香港の現代宗教』	92
宮坂 清：長岡慶著『病いと薬のコスモロジー』	95
佐藤 弘夫：吉田一彦編『神仏融合の東アジア史』	101
清水 邦彦：朴炳道著『近世日本の災害と宗教』	107
飯島 孝良：山田契治、ジョン・ブリーン編『鈴木大拙』	112
平 寛多朗：八木久美子著『神の嘉する結婚』	119
東長 靖：澤井真著『イスラームのアダム』	125
渡辺 優：御園敬介著『ジャンセニスム 生成する異端』	132

日本宗教学会

2021年12月